

南米の日本語教育実践報告

118

【ブラジル】コロニア言語資源、地域的環境を活用した日本語教育について
松本絵美（JICA青年ボランティア、コロニアピニャール日本語モデル校）

コロニア言語資源、地域的環境を活用した日本語教育について ーコロニア・ピニャール日本語モデル校の活動報告ー

松本絵美

コロニア・ピニャール日本語モデル校

〔要 旨〕

コロニア言語資源、地域的環境を活用した日本語教育について、JICA ボランティアとしてどのような活動を行っているかについて発表した。

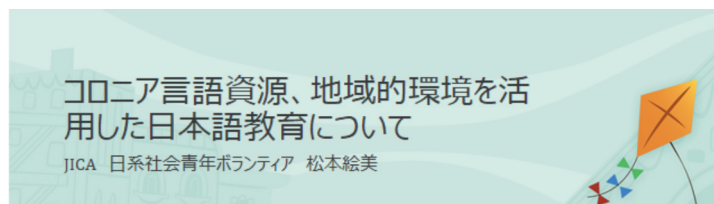


図 1

1. JICA 日系社会ボランティア

JICA ボランティア事業では、日本の政府予算 ODA を利用して開発途上国の要請に合わせて技術・経験・知識によって支援を行うことで、開発途上国の発展、異文化社会における相互理解、ボランティア経験による社会貢献が目的とされている。JICA 海外派遣ボランティアであり、中でも日系社会に特化した国への派遣ボランティアは日系社会ボランティアと呼ばれている。

2015 年度、ブラジルのコロニア・ピニャールの要請内容は、以下のようだった。“日本語読解力の支援、日本語の会話に親しませる、課外教室(音楽、体育、絵画、書道)の中で一つを担当、日本語学校生徒に対する日本語教育を中心とした学校教育活動全般に渡ること(幼児教育、音楽、体育、体験学習など特別活動も含む)、前々期の青年二人は子どもたちにピアノのレッスンも行っていた。文化教育のない村なので、できれば子どもたちが楽しみにしているこのレッスンを続けてくれる人を希望する。”(図 2：発表 P.P.)



図 2

要請内容から自身の経験・知識・技術を擦り合わせた実際の活動は、中上級生クラス指導（月曜から金曜日 150 分×3 クラス）、スポーツ・文化授業の開催、行事でのよさこい発表指導巡回、聖南西教育研究会への参加、林間委員の企画、実行、運営、文協行事の参加などである。（図 3：発表 P.P.）



図 3

さて、このように、任地によってさまざまな職種、要請内容があるが、私たちに求められているものは、「日系社会の活性化を図る」ことである。（図 4：発表 P.P.）



図 4

私は以下のアジェンダに沿って、コロニア・ピニャールの日本語人材の紹介、そしてコロニア・ピニャールの環境と日本語教育的活用方法、そして、これからの課題について発表を行った。（図 5：発表 P.P.）

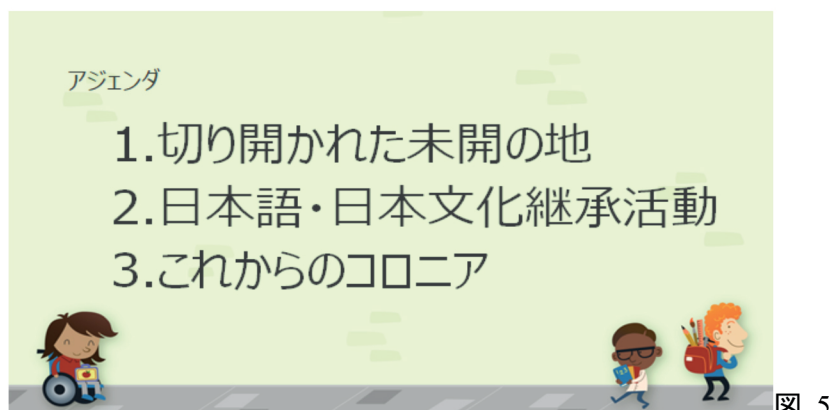


図 5

2. コロニア・ピニャールの言語資源と地域的環境の活用例

本章では、コロニア・ピニャールが一体どのような場所であるのかを紹介するとともに、どのようにして、コロニア・ピニャールの子どもたちが日本語、日本文化、日本的習慣を自然と

身につけているかについて考察していきたい。

2.1. コロニア・ピニャールの言語資源

コロニア・ピニャールの特徴の一つとして、福井県と JICA の直轄移住地であることがまず、挙げられるであろう。1962 年、三家族が入植し、当時は「収容所」と呼ばれる、土壁の共同住宅より農地開拓を始めた。「桑で大地を書けばお金がやってくる」と聞かされてやってきた移住者にとって電気も、水道もないこの地は驚きと苦労の始まりの土地であった。移住者によって、徐々に、子供たちには寺子屋式の日本語教室、そして、ブラジル小学校が設立され、大人たちは農地を開拓し、農家としての生計を立てていき始めた。(図 6：発表 P.P.)



図 6

日伯友好 100 周年には、このような巨大な鳥居が建つほどに何もない所から、コロニアの農業は成功を成し遂げた。(図 7：発表 P.P.)



図 7

ブラジルの広い大地の中の小さな日本人村は、サンパウロより南西 120 km に位置する。(図 8、9：発表 P.P.)



図 8

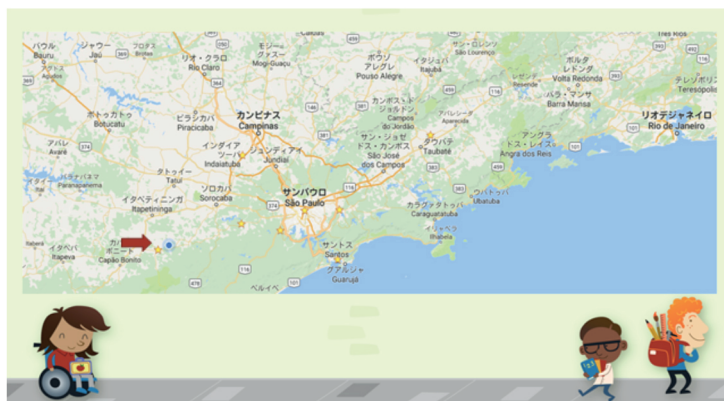


図 9

この辺り 100 km 範囲を聖南西地域と呼び、ブラジルの中でも指に数えられるほど日本語教育に活発で熱心な研究会がある。(図 10：発表 P.P.)

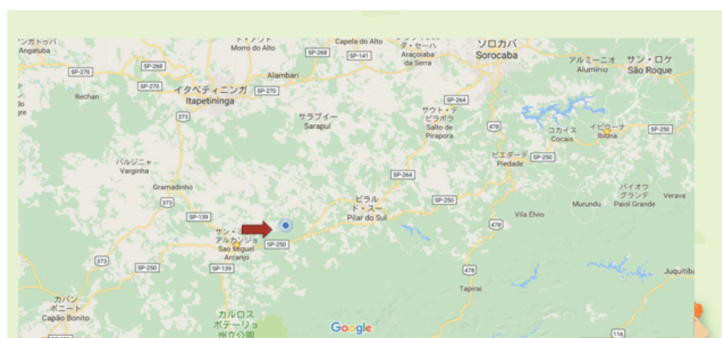


図 10

2.2. コロニア・ピニャールの人材

私の任地は戦後移民ということもあり、一世がご健在である。荒地を開拓し、日本人としての誇りをもって、生ける教科書としてコロニアを支える日本語しか話さない一世の存在は大きい。(図 11：発表 P.P.)

そして、日本的習慣を持ち合わせ、一世の強い信念を継承している準二世。彼らは、幼いころにブラジルへ両親と共に渡伯し、ブラジルで教育を受けているために、ポルトガル語と日本語が話せるため、ブラジル社会とのつなぎ目の役割も果たしてくれた。(図 12：発表 P.P.)



図 11



図 12

どんどん、少子高齢化になっていく村の危機を感じ、村の存続をかけて活動してくれる二世、三世の存在。(図 13：発表 P.P.)そして、幼い時から日本語を学ぶことがごく当たり前になっており、日系人としてのアイデンティティを育んでいる三世、四世の存在。(図 14：発表 P.P.)



図 12



図 13

2.3. コロニア・ピニャールの環境

この地では、主な産業は果物である。ぶどう、柿、びわ、金星（デコポン）、桃、アテモヤなどが生産されている。日系人ならではの真面目で丁寧な仕事は実を成し、それぞれの作物が美しくたわわになっている様子がよく見られる。ブラジル国内、海外での評価が高く、農家として十分に生計が立てられている。(図 15：発表 P.P.)



図 14

【南米の日本語教育事情】

コロニアの特徴、その二に挙げられるのは、「何もないこと」ではないだろうか。左下図は組合と呼ばれる小さな購買である。コロニアに、銀行、病院、市役所、郵便局、レストランはもちろんパン屋でさえもない。何かを販売しているのは、この組合だけである。組合では、郵便の受付も行っているため村の交流場所にもなっている。図右下は会館と組合である。村民の健康を保つため日々、太鼓、卓球、シルバーバレー、サッカーなどの練習が行われており、年に数回、文化体育協会で資金集めのイベントを行う時も利用される。(図 16、17：発表 P.P.)



図 15



図 16

図左下は南米最大の日本語青年図書館である。約 7 万 5 千冊の日本書籍がだれでも無料で借りられるようになっており、日本語学校の宿泊学習でも本の読み聞かせに利用される。そして、忘れてはならないのが、コロニア・ピニャール日本語モデル校。本校は、1997 年に JICA の助成を受け建設された。日本の小学校を基礎にし、ブラジル風にアレンジされた学校である。(図 18、19：発表 P.P.)



図 17



図 18

3. コロニア・ピニャールの日本語・日本文化継承活動

本校では、日々このような活動が行われているが、授業の他にも日本語を通して行う活動がある。

クラス		
クラス	日本語学習	文化活動
月曜日	スピーチ	音楽
火曜日	文法	文化・スポーツ
水曜日	読解	工作
木曜日	漢字	パソコン学習
特別文化活動日		

- ・一週間に5日授業
(1コマ150分)
- ・曜日による特別活動
- ・全校生徒による月に一度の校内1分スピーチ
- ・聖南西地域という強み

活動があまりにも多いため、省略しながらも、色分けにて、紹介したい。文化体育協会活動をオレンジ、日本語学校活動をピンク、聖南西地域としての日本語教育活動を青として活動例を紹介する。(図 20-26：発表 P.P.)



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23



図 24



図 25

4. コロニア・ピニャールの課題

一見、成功しているかのように見えるコロニア・ピニャールにも大きな課題が存在する。



図 26

コロニア・ピニャールの一番の課題として挙げられるのは、少子高齢化である。毎年、ブラジルの公立学校出身者でありながら、村から USP への合格者が出るほど優秀な人材は、町の大学へ行き、そのまま町で就職し、生活を送ることが増えた。このことにより、村民が大きく減少し、一世、二世の高齢化が進む一方である。

その解決策として、村では、若者の働く場所の確保が大事であると考え、「観光農園部」を開設した。この地ならではの自家製ジャムやコンポートを作り、村のデザイナーによりパッケージを発注し、村で販売するという、全て村で行うことができる新しい商業を考えた。現在、二世、三世の婦人によって経営されている。(図 28：発表 P.P.)



図 27

それでは、まだ、少子高齢化に歯止めがかけられない今、この時にボランティアも村民の一人として、村の存続を考えていくべきである。このように、課題を考える時に、コロニアの魅力を知ってもらうことで、さらなる村民確保ができるのではないかと考える。(図 29：発表 P.P.)



図 28

コロニア・ピニャールは、日本語で生活ができる稀有な場所である。また、日本人の習慣とブラジル人的習慣の両方を持ち合わせている。日本の小学校を基礎に作られた日本語学校がある。コロニアに住む人は皆コロニアが大好きである。コロニアを再建しようと考えている人がいる。(図 30：発表 P.P.)

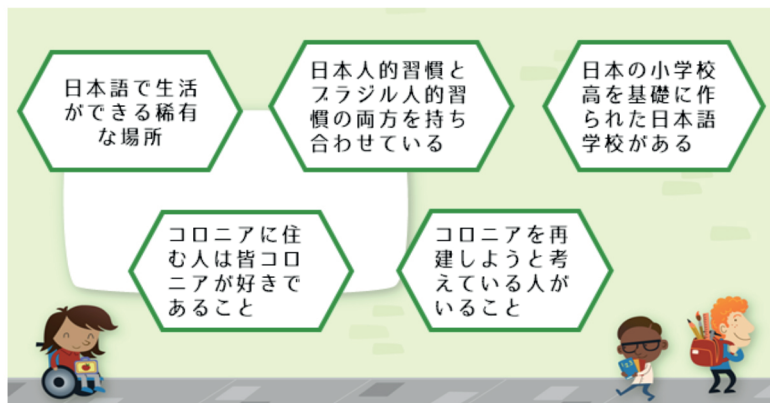


図 29

このように魅力が詰まったこの場所で、コロニア自身は支援を待つのではなく、自ら売り出していくべきだと考える。これほどまでに日本語教育にぴったりの言語資源と環境がそろった場所は他にあるであろうか。多くの人と相談しているうちにコロニアには多くの可能性を秘めていることが分かった。日本人の海外で働きたい人向けの農業訓練場所にしても良い。日本からブラジルへ帰って来たばかりの家族がブラジルに慣れるための一時滞在場所にしても構わない。また、日本へ行く人のための日本的習慣・文化を知るための一時滞在場所にしても構わない。外務省 中南米日系社会との連携に関する有識懇談会でもあったように、ブラジルには日本と寄り添って、日系社会と寄り添って歩める未来がある。夢のような話に見えるが、日系社会そのものが動いていかなければ日本語教育そのものが良い悪いに関わらず変化していくだろう。しかし、この地もその変化に流されていいのか、それとも変革していかなければならない

のかはこの村の人が一番よく知っている。



図 30

5. 最後に

私たち JICA ボランティアは打ち上げ花火のような存在である。しかし、任地と共に歩んできた2年の月日は、私に任地の日本語教育を考えさせるには十分な時間であった。現在でも、コロニア出身の JICA ボランティアは、日本でも定期的に集会することで見守っている。共に考え、魅力ある任地、魅力あるブラジルを広げていくことが我々の活動であると考えている。それが、ブラジルの日本語教育を、ブラジル社会を活性化していくことであると思われる。

JICA ボランティアはブラジル全土に広がり、様々な悩みや問題と共に活動しているが、ボランティア全土にわたるネットワークという強みを活かし、ブラジル全土の日系社会をささやかながらでも活性化できたら、と願う。